石川県七尾美術館だより

平成31年１月１日発行
編集･発行　(公財)七尾美術財団

第96号(冬号)

「様々な風景を楽しむ」

日本画「刻々と、Ｔｏｌｅｄｏ」士農　力
改組 新 第２回日展　当館蔵

ISHIKAWA
NANAO
ART MUSEUM

展覧会紹介

平成31年1月4日(金)～4月21日(日)
休館日については裏表紙をご覧ください

「桃山のやきものを愛でる」
「様々な風景を旅する」

12月15日(土)[開催中]～2月11日(月・祝)

平成7年の開館当初、400点に満たない点数でスタートした当館所蔵品は、さらなるご寄附や購入によって約760点を数え、現在寄託作品をあわせて840点以上の作品を収蔵しています。

今回はその収蔵作品から、次の2テーマで展覧します。冬のひと時、温かい展示室でゆっくりほっこりしませんか。

◇第1展示室

「桃山のやきものを愛でる」

日本の「やきもの」を語る上で、欠かすことができないのが「桃山時代」です。千利休をはじめとする茶人たちにより茶の湯が普及し、戦国時代は織田信長や豊臣秀吉ら武将たちの心も捉えました。大寺院などで頻繁に茶会が催され、様々な茶陶が制作されました。

本テーマでは、七尾市出身の実業家・池田文夫氏（1907～87）が、生前に蒐集した美術工芸品「池田コレクション」より35点を展覧します。

「志野草花文足付香合」

「備前種壺水指」
※替蓋は川瀬竹春作。

志野焼、織部焼、唐津焼、備前焼など、味わい深い桃山のやきものたちをお楽しみください。

「織部鮑形向附」

「黒唐津沓形茶碗」

※本テーマ掲載作品画像は全て「池田コレクション」です。

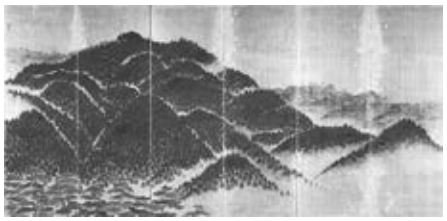
◇第2展示室

「様々な風景を旅する」

この地球上には、世界的に知られた名所から、とある小さな町や村の名もない路地まで、数えきれない多くの風景があります。それらの風景には、それぞれ異なる魅力があり、そこに暮らす人々や旅人を惹きつけ、時には厳しくも、感動や癒しを与えてくれます。

本テーマでは、作家たちが心惹かれた国内外の様々な風景を、具象・抽象問わず、近現代絵画24点で紹介します。

絵画でたどる旅をお楽しみください。


「七尾城址・能登島図屏風」（左隻）　上田珪草　個人蔵

【風景画の歴史】

風景は古来より世界中で描かれてきましたが、元々は背景として描かれていたものが、やがて風景をメインとして描く「風景画」へと展開していきました。西洋では17世紀に入ると「風景画家」と呼ばれる専門画家が誕生し、制作場所は人物や静物、宗教画を描く屋内から、自然の様々な表情を捉えるため屋外へと移り、油彩画の名画が誕生していきました。東洋では3～4世紀頃の中国六朝時代に「山水画」が制作され、禅僧の余技としても好んで描かれました。日本へは奈良時代頃に伝わったとされ、やがて日本独自の自然や風土と混ざり合い、多くの水墨・着色の山水画が生まれました。明治時代には、西洋画の画材や遠近法なども取り入れられ、日本画と洋画、それぞれの魅力ある風景画が制作されていったのです。また、20世紀ヨーロッパで抽象画が流行ると、その波は日本にも流れ込み、抽象表現による風景画も誕生しました。

「In New York City Soho」戸澗幸夫

「黎明’74」勝本冨士雄

◇共通観覧料

	個人	団体
一般	350円	280円
大高生	280円	220円

※中学生以下無料・団体は20名以上です。

「モチーフを知る ～仏画から肖像まで～」
「バードパラダイス!!」

2月23日(土)～4月21日(日)

◇第1展示室
「モチーフを知る ～仏画から肖像まで～」

神像や仏像にはそれぞれのご利益、仙人には仙術など、作られた理由や、像主を特定する特徴があります。一般的な仏像として、釈迦や如来、菩薩に神、高僧などがまつられています。「観音さま」の呼び名で親しまれている仏さまは、正式には観世音菩薩、または観自在菩薩といいます。「悟りを求める者」を意味する「菩薩」のグループに属し、後にその上のステージ「如来」になることが予定されています。常に私たちに寄り添い救済してくれるとされていることから、基本の像容は人間的な姿である1面2臂の「聖観音」で、左手には蓮の花、頭には小さな化仏（阿弥陀如来の化身）が乗っています。そして、人々を様々な困難から素早く救済するために「十一面観音」や「千手観音」など多様な姿に変化したのです。

「聖観音菩薩像」高村光雲（池田コレクション）

肖像作品には、タイトルだけでは作者とモデルの関係までを知ることのできないものがあります。例えば当館所蔵の彫刻作品、田中太郎の「詩人」。モデルは七尾市出身で文筆家としても知られた相澤道郎（1915～87、本名：相川龍春）です。終戦後の七尾では田中太郎、上田珪草（日本画家）、勝本冨士雄（洋画家）と出会い、以後も交流を続けた人物です。制作年から推測すると相澤55歳頃の姿をとらえた作です。

「詩人」田中太郎

モチーフが何であるか知ることで、少しだけ作品の見方が変わるかもしれません。絵画と彫刻を中心に25点の展示を予定しています。

◇第2展示室
「バードパラダイス!!」

当館の屋外広場には鳥や鴨が集い、ムクドリなどが姿を見せ、近くの林には鷺の群れが営巣しています。

鳥たちがその翼で大空を飛ぶ姿は古代から人類の憧れの対象でした。神話にも数多く登場し、古代文明のレリーフや壁画などにも描かれてきました。鮮やかな羽色は私たちの目を楽しませ、身の回りを飾り、美しいさえずりは荒んだ心を癒してくれます。そして一方の鳥たちも、より安全な場所で巣を作り、多くの食料を得るために、人間の傍で生活することを選択したりするのです。このように鳥は常に人間の身近な存在であり、さまざまな芸術の分野において重要なモチーフとなりました。多くの美術工芸品を飾り、古くから私たちの身の回りを彩っています。

その代表格である瑞鳥の「鶴」は今でこそ身近な鳥ではありませんが、万葉集や昔話に登場するなど日本人に親しまれてきた鳥でした。現在、国内には7種類の鶴が生息していますが、野生の丹頂鶴は北海道でしか見ることができません。しかし、昔は全国でその姿を見ることができたそうです。江戸時代までは大名による鷹狩りの獲物として保護の対象でもあったため、その生息数・地域ともに大きかったのです。明治時代に入ると庶民にも狩ることが許され、その肉の美味しさから、明治25年の「狩猟規則」制定まで乱獲が続き、個体数は激減しました。にもかかわらず、丹頂鶴の人気は衰えることを知らず、作品は人々の求めに応じて制作されてきました。

当館所蔵品より、「花鳥風月」にも代表される鳥の姿を、絵画・工芸・彫刻作品約30点でご覧いただきます。桃山から現代までの鳥たちが集う楽園にお越しください。

「鶴」上田珪草

「象嵌水鳥置物」「象嵌糸印紋水鳥置物」高橋介州（池田コレクション）

◇共通観覧料

	個人	団体
一般	350円	280円
大高生	280円	220円

※中学生以下無料・団体は20名以上です。

貸館催し物案内

アートホール

ちびっこ発表会

無入場料

2月16日（土）開演　午前9時

小丸山認定こども園では、年に1回表現発表会を催しています。0歳児から年長児までの成長がわかると共に、子ども達にとっても発表の場として有意義なものです。是非皆さん見に来てください。

主催・連絡先　小丸山認定こども園
☎0767（53）3700

ピアノ学習者と指導者のための音楽歴史紀行
第3回「モーツァルトの魅力」

3月3日（日）開演　第1部　午後1時30分
第2部　午後3時

第1部は幼少期の作品と誰もが楽しめる名曲が中心のお子様も楽しめるコンサート、第2部は歴史と楽譜から読み解く「モーツァルトらしい」演奏法・指導法セミナーです。講師・久元祐子氏のお話と演奏をお楽しみください。

入場料　第1部　1，000円
第2部　3，000円
通し　3，500円

主催　能登ピアノレスナー会

助成　いしかわ県民文化振興基金

連絡先　石島　☎090（2090）1861

第19回友の会鑑賞の旅実施報告

今年度の友の会鑑賞の旅は、当館夏季特別展「北斎展」開催を契機として、より葛飾北斎への関心を深めるため、10月12日（金）に「北斎を巡る旅」と題して、北斎ゆかりの地である長野県小布施へ行きました。

まず、最初は北斎ゆかりの寺として知られる岩松院へ。ご住職の奥様の解説を聞きながら、本堂の天井画「八方睨みの鳳凰図」を鑑賞。北斎最晩年制作と伝わり、極彩色に彩られた鳳凰が実に鮮やかで、その勇壮な姿に皆さん天井を見上げ感銘を受けていました。

昼食は、小布施名物栗おこわと信州そばをいただきました。季節感満載のボリュームたっぷりなメニューで心もお腹もいっぱいになりました。

午後は、北斎の肉筆画を主要テーマとしている北斎館へ。同館荒井学芸員に解説をいただきながら、各展示室をまわりました。企画展では、富士山をテーマにした浮世絵版画を鑑賞。その大胆な構図や細部にまでこだわった表現に、北斎の鋭い洞察力が遺憾なく発揮されていました。

肉筆画展示室では、北斎の絶筆に近いとされている作品「富士越龍」をはじめ様々な肉筆画を鑑賞し、晩年の北斎世界を堪能。九十歳をこえても精力的に創作を続けた北斎のパワーに皆さん脱帽の様子でした。

少し肌寒くどんよりとしたお天気でしたが、ご参加の皆様や見学先の皆様のご協力により、無事終えることができました。本当にありがとうございました。

岩松院前にて

美術館ボランティア研修旅行に参加して

ボランティア監視員　山下　富美子

10月26日（金）爽やかな秋晴れのもと、職員3名ボランティア20名で富山へ行ってきました。

最初に去年夏に開館した富山県美術館へ。そこは広大な環水公園の西地区に位置し、遠く立山連峰が望める素晴らしい景観美の中に建っていました。職員は三宅一生デザインの制服を着用し、屋上には多種多様な遊具を配したオノマトペの庭園があり、常設展は70歳以上観覧無料というサービスぶり、目にも懐にも優しい美術館でした。

次に、今回3度目というホテルでの美味しいランチに舌鼓をうち、樂翠亭美術館へ向かいました。

そこでは、「鍛金師長谷川竹次郎」の茶箱コレクションに心を奪われました。趣味で集めた蒟醤、藍胎、南鐐等の小筥に個々の大きさに合わせて風炉や茶入れや茶巾筒等茶箱の皆具を自身で作成し、ぐい呑みより小さな茶碗の中には金継ぎをしたものまであり、その精密な造りと組み合わせの素晴らしさに感動しました。

最後に、北前船回船問屋森家へ行きました。畳の敷き方、廊下の板の組み方、囲炉裏の自在鉤等に商売繁盛を願う工夫を凝らした商家です。莫大な富をもたらした北前船の繁栄ぶりと、その時代に思いを巡らせたひと時でした。

心豊かになれた一日をありがとうございました。

樂翠亭美術館にて集合写真

森家での様子

等伯コーナー

「長谷川等伯展」特別講演会報告

「長谷川等伯～雪舟から等伯へ ―雪舟画系の展開～」

講師　守安　收　氏
（岡山県立美術館館長）

【最初に】

私が勤務する岡山県立美術館は、岡山ゆかりの作家や作品を常設展示しています。そこで、岡山の画家の頂点に位置する雪舟に関わる作品の収集や展示を行ってきました。ただし、雪舟は生前から今に至るまでずっと評価が高く、人気が維持されてきましたから、三十年ほど前の美術館開設準備の段階で、雪舟の作品を何点もコレクションすることなどは無理と考えておりました。それ故、雪舟が影響を受けた日本や中国の画家とか雪舟の有力な門人たちについても収集の対象とすることを決めました。そんな中、幸いにもその要となる画家の一人であり、ご当地七尾出身の長谷川等伯の若い頃の作品である《芦葉達磨図》を収集することが出来た次第です。

画系の上で、雪舟と等伯とが関係するということは、等伯自ら「雪舟五代」と作品に墨書していることから明らかです。この度、七尾美術館から図録の執筆依頼がありましたので、雪舟の画法とか画風といったこととは別に、二人に共通する事柄はないかなと考えてみたところ、二人とも途中で「名前」や「号」を変えていること、それによって、何百年もの長い間、日本絵画史で巨匠と呼ばれる高名な二人の前半生に関することが不明であったというあたりを中心に書いてみようと思いました。詳しくは図録をご覧ください。

雪舟は一四二〇年生まれですが、没年はこれまで通説となっていた一五〇六年というところは確定できません。疑問符がつきます。その彼は四十八歳で中国へ渡りましたが、それ以前に「ゆきふね」と書く「雪舟」という号に変えたことが知られています。しかし、雪舟と号するまでの間、何という画号を用いていたのかが分からないままという状況が続いていました。確認されたのは今からほんの三十年くらい前のことです。

一方、等伯の方も没後五十年ほど経つと、長男の久蔵と長谷川信春とは同じ人、つまり信春が息子の名前であると思われるようになりました。信春というのが等伯の若い頃の名前であると分かったのは、戦後のことなのです。

今日は、彼ら二人の改名、改号問題などもからめながら演題に沿って、お話しさせていただきます。

【雪舟　一四二〇～一五〇六？】

雪舟は室町水墨画を大成した画僧です。諱（いみな＝本名）は等楊。備中赤浜（現・総社市赤浜）に生まれました。この赤浜生まれということも、没後二百年近く経ってから通説になったのですが、これが確実といえるようになったのも、ここ二十年くらいです。赤浜在住の「藤氏重定」の一族で、「藤氏」は臨済宗仏通寺派の禅庵を建立し維持することができる程の地域の有力者でした。雪舟が「涙でネズミを描いた」伝説で知られる宝福寺（総社市井尻野）に入った後、上洛して禅を相国寺の春林周藤に、画を天章周文に学んだと伝わります。でも、私は相国寺の前に京都の東福寺に入ったのではないかと考えています。宝福寺と東福寺はとても近い関係にありましたし、水墨画で仏画を描く画家たちが東福寺を拠点としていたのです。また、雪舟はそういうタイプの作品を制作しております。彼の若いころの履歴については不明な点が多いのですが、今では同時代の画家で音通する「拙宗等揚（せっしゅう・とうよう）」を彼の前身とする説が確実視されるようになりました。先ほども申しましたが、三十年ほど前からです。

三十代半ばからは守護大名大内氏が支配する山口へ移り住み、また「雪舟」号への改号については、近年の発見から三十八歳頃からと明らかになってきました。この改号時期もこれまで入明の直前とされていましたから、「拙」という字の拙宗時代が短くなり、「雪」の字の雪舟時代が延びたということです。今後、履歴や作品の編年の面で新たな検討が必要になります。また、彼が京都を離れた理由についても研究の余地があるでしょうが、最大の要因は、雪舟のやや粗野にもみえる骨太で力強い作風が、押しつけがましいとか、洗練されていないとか、田舎風などと思われてしまい、貴族的で文学的で繊細さを善とする都の好みに合わず、実力が十分に評価されなかったためだったのでしょう。山口への移住も、「雪舟」への改号もそれまでの自分を一旦捨て去りたいという意識が膨らんでのことであったのかもしれません。そして山口では大内氏の庇護下で画房雲谷軒（雲谷庵）を営んでいました。

一四六七年（応仁元）、彼は大内氏の遣明船に乗り、水墨画の故郷中国へ渡ります。足かけ三年に及ぶ明国滞在を通じて宮廷画家李在らに画法を学び、文人たちと交流した経験と明代絵画を中心とする作品や大陸の風景・風俗に触れた体験とが契機となって画境は大きく広がりました。帰国してからは諸国を遊歴します。一四七六年（文明八）頃は大分でアトリエ「天開図画楼」を築いて活発な作画を行い、また旅に出て一四八一年（文明十三）には美濃に友人を訪ねています。一四八六年（文明十八）十二月には、山口で画師としての自負を込めた大作《山水長巻》（国宝、防府毛利報公会）を制作、以後、同地が雪舟の活動拠点となりました。

雪舟の作品については後ほどスライドで紹介さ

せていただくとして、雪舟の美術史的意義を簡単に申しますと、画の題材が山水・花鳥・道釈人物・肖像・風景写生と豊富であることが大きな特徴です。宋元画を中心に古画を学び、中国大陸に渡って当時の明画も吸収し、水墨・着色の両面で描法を多様化させた点も重要です。また晩年の作には多く款記し、印章を捺すことで画家としての自立性を明確にした点も前代とは異なります。加えて教育者としての側面も無視できません。山口に在った雪舟の画房雲谷庵から秋月、宗淵、周徳ら優れた門人が輩出し、山口以外でも、長谷川等伯に繋がる等春らを指導しました。この門人の育成、画法の伝授に尽力したということは実に大きな功績ですし、彼らの活躍は雪舟の画名を高めると同時に雪舟画系の全国展開に結びついていきます。雪舟画の影響が同時代のみならず後世の画人にまで広範囲に及んだことで、彼は画聖と称えられるようになりました。

【雪舟画系の展開】

雪舟には大勢の門人がおり、禅僧だけではなく、俗人もいたようです。ともあれ、雪舟自身に加えて多くの門人たちの活動、さらに彼らの弟子、孫弟子たちの活躍によって雪舟ブランドの価値が高まり、雪舟との関係性をアピールすることによって、画家としての存在感をアップすることができるという認識が広まります。現在、直接師事した人も、そこからの流れを汲んだ人も、雪舟に私淑した人も、まとめて「雪舟流」の画家と呼んでいます。

とりわけ、雪舟流の正系、直系として知られるのが、桃山時代に雪舟ゆかりの山口を拠点にして「雪舟末孫」と記した雲谷等顔が創始した雲谷派です。息子の等益は、「雪舟四代」を称しました。雪舟、周徳、雲谷等顔、等益という順です。この雲谷派は長州藩毛利家お抱え絵師として幕末まで続きます。

江戸時代になって編纂された各種の画伝類の中には随分たくさんの雪舟流画人の名前が出てきます。それは雲谷派のみならず画壇の本流ともいうべき狩野派を筆頭とした諸派による雪舟イメージの理想化の進展があったということです。そうしたことから雪舟の画法を忠実に学んだかどうかは別として、雪舟という名前を利用しながら画の世界を生き抜いた画家がいたという現実があります。レジュメに『等伯画説』『画師的伝宗派図』『丹青若木集』などのことを簡略にまとめておきましたので、ご参照ください。

さて、雪舟流を画系図からみると、雪舟の直弟子として史料的に確実なのは、《山水小巻》（重文、山口県立美術館）を与えられた雲谷等悦。薩摩出身者で雪舟七十一歳《自画像》を与えられた秋月等観。七十六歳作の《破墨山水図》（国宝、東京国立博物館）を与えられた如水宗淵の三人です。他には、『等伯画説』（重要文化財、本法寺）に記載されている等春。雪舟のアトリエ雲谷庵を継承した周徳。もう一人は雪舟の友人の萬里集九を介して学んだ如寄。その他の画家については、遺された作品から判定するしかないといったところです。

【等春から等伯へ】

雪舟と等伯を繋ぐ人物が等春です。等伯が語った諸々のことを京都本法寺の第十世住職日通上人が書き留めた史料を『等伯画説』といいます。そこには系図も記載されており、それによると初代雪舟、二代等春、三代無文（正しくは無分）で号は法淳、四代が宗清、五代が等伯となります。

雪舟画系が等伯へと繋がるとするならば、等春に注目せざるを得ません。彼は大徳寺の禅僧です。『等伯画説』によると、奈良の大工の子でしたが、出家して雪舟の門に入って画を勉強し、四国の阿波・讃岐の守護大名であった細川成之から扶持を得ていました。加賀の富樫氏、能登の畠山氏とも関係があったとされ、雪舟が等春を連れて加賀を訪れ、雪舟は去ったものの等春は三年逗留したとのことです。代表作に《花鳥人物図貼交屏風　景徐周麟賛》（重要文化財）があり、明らかに雪舟流といえる作品や、お家芸ともいうべき潑墨の《瀟湘八景図巻》（正木美術館）の存在も等春が雪舟門弟であることを強く示唆します。彼は雪舟流画人中、最も優れた画技を有する人でした。

それでは、七尾にいた長谷川家が等春にどのような形で学んだのでしょうか。従来、等春の能登訪問時に師事したと想定されてきたのですが、近年は伝手を頼んで養祖父法淳が京都の等春のもとに赴いたとみる説も唱えられています。等春の没年から推して、長谷川家で直接師事したのは法淳だけなのでしょう。四代目の養父宗清も父に劣らぬ優れた絵師でした。彼の作品と等伯の若年時のそれとを比較すると、表現手法が共通し、父子で似ています。長谷川家の法淳や宗清は、染物屋の絵師というレベルではなく、二代にわたって能登を中心とする北陸の地で重んじられてきた本格派の絵仏師でした。若き等伯が二十歳代から主に仏画を手掛ける絵師として活躍するための基礎は、まずは養父によって鍛えられたものと理解してよいでしょう。

【長谷川等伯　一五三九～一六一〇】

能登国七尾の城下において守護畠山氏の家臣奥村文之丞宗道の子として生まれ、幼い頃に染物を業とする長谷川宗清の養子となったとされます。二十歳代から主に仏画を手掛ける絵師として活躍しましたが、養父宗清、養母妙相を相次いで亡くした一五七一年（元亀二）三十三歳の頃から京都に拠点を移したようです。それまでにも何度か上洛していたことが分かっています。そして「長谷川等白五十一歳筆」と記名した作品（大徳寺三門楼上壁画）が現れ、それから間もなく「等伯」と改めたと思われます。つまり、彼は五十歳を過ぎた時点で「等伯」を名乗り始めたのであり、それ以前は別名で画業を行っていたということです。それが、かつて等伯の長男久蔵（一五六八～九三）の名とされていた「長谷川信春」でした。このことが不明だったのです。

代々熱心な法華宗信者である長谷川家に育った若き信春は、七尾周辺の法華宗寺院の祖師像や仏

画を盛んに制作しました。家業としての仏画制作、すなわち絵仏師が彼の出発点ですが、早期の作例には花鳥を描く水墨画や風俗画も含まれており、純然たる絵仏師というわけではありませんでした。もっとも、法淳や宗清や信春の描く仏画類が雪舟やその弟子たちのそれに倣ったということではなく、仏画に関していえば、長谷川家の表現は雪舟流とはまた別種のものでした。

その一方で、信春には雪舟や等春との影響関係が認められる作品が幾つか伝わっています。例えば、信春時代の《花鳥図屏風》（重文、妙覚寺）は、少なくとも雪舟筆《四季花鳥図屏風》（重文、京都国立博物館）を実見するか、それとも良質な粉本を入手する以外には描き得ないはずです。しかも、妙覚寺本で発揮した筆線や彩色は等春の《花鳥人物図貼交屏風》中の「梅花鳩図」のそれに似ているように、彼は等春の画風を十分に身に着けていたのです。そうした筆描は等伯時代になってからの《瀟湘八景図屏風》（東京国立博物館）などへと繋がっていきます。

また狩野派との関係も見逃せません。『丹青若木集』では、初め越前の「曽我紹祥」を師とし、上洛してからは「狩野民部法眼（松栄。永徳の父）」に学び、その後一家を樹立したとあります。信春時代の《達磨図》（龍門寺）は、明らかに大徳寺真珠庵に伝わる曽我墨谿筆《達磨図》を参考にして描いており、曽我派を学んでいたことは確かです。と同時に、狩野派系の画伝書や長谷川家の系譜は内容こそ異なるものの、いずれも等伯が狩野派に学んだとしています。しかし、信春時代に狩野派の作品を模範としたと想定できるものは必ずしも多いわけではありません。《春耕図》（京都国立博物館）や《陳希夷睡図》（石川県七尾美術館）らは狩野派風が顕著なもので、前者は人物の形態等に、後者は衣文線などが狩野派風といえます。いずれにせよ、信春の京都移住に関して、当時の画壇の主導権を握っていた狩野派との関係を無視するわけにはいかないでしょう。彼の実家である奥村家も長谷川家も、狩野家も皆、法華宗の熱心な信者でした。信春が京都で頼ったのは、実家奥村家の菩提寺本延寺の本寺である本法寺であったように、法華宗のネットワークの存在が大きく、同じ宗徒の狩野家の傘下で画業を続けるということが了解されていたのではないでしょうか。信春は移住前から狩野派との関係を維持していたと思われます。とはいえ入洛後、狩野派の中枢で活動したともいえないでしょう。曽我派や雪舟流にも手を広げた様子が看取できることから、狩野派の厳重な枠に束縛されていたのではなく、傘下であったとしても周辺での活動が日常であったと考えたいところです。

しかるに、信春が次第に力をつけ、秀吉や利休を筆頭に京都の有力者や大きな寺院を顧客とするに至って、狩野派との対立が顕在化します。対立は彼が重用されたことから生じたことで、一時的にでも師事したことが想定される狩野派からの離脱が円満円滑に行われたとは思えません。そこに改名の理由があるのではないでしょうか。信春を等白（伯）へと改名したということ、狩野派一門が使用する「信」字を雪舟等楊の系字である「等」に改めることで、彼は狩野派と訣別したことを公にし、雪舟流の一派であることを明らかにしたのではないでしょうか。

一五九九年（慶長四）、彼は巨大な《涅槃図》（重文）を本法寺に奉納しました。その右端には「願主　自雪舟五代長谷川藤原等伯　六十一歳　謹書」の款記があり、この時期から彼は「雪舟五代」を名乗ったようです。「雪舟五代」と款記された作品は決して多くはありませんが、《鳥鷺図屏風》（重文）、六十九歳筆《竹林七賢図屏風》（両足院）、七十歳筆《日通上人像》（重文、本法寺）などが該当し、晩年まで使用されていることが分かります。

等伯と同じく雪舟流を唱える雲谷等顔が「雪舟末孫」と自署して雪舟本流であることをアピールしたということは先ほど申しましたが、等伯はそれからしばらくして「雪舟五代」を名乗り始めたようです。等伯は高級ブランド「雪舟」の名前を堂々と書き入れることで自らの存在価値を一段と高めようとしたのでしょう。当時天下人秀吉をはじめ大寺院や有力者らの依頼による作画を数多く手がけ、既に高い名声を得ていたにもかかわらず、でした。

長谷川信春は五十歳を過ぎて等伯と名を改め、さらに雪舟流の継承者として世に対峙しました。装飾性と叙情性を兼ね備えた金碧障壁画、風趣豊かな水墨画を描くなど作風は多彩です。彼は旺盛な制作意欲を呈して下剋上の戦国時代を生き抜いた画家であり、画壇の雄として等伯の名を轟かせたのです。

【雪舟と等伯、二人の改号・改名】

拙宗等揚は三十八歳頃に雪舟等楊と名乗りを改めました。それまで築き上げた多くを捨て去り、改号を新たな出発点としました。四十八歳で敢行した渡明、その後の活躍が彼の前身を覆い隠してしまったのです。前身を語らず、後半生に賭けた雪舟の意図はみごとに実現したといえるでしょう。

他方、長谷川信春は五十歳を過ぎて等伯と改名しています。それは狩野派との深刻な対立に起因し、余儀なく改めた色合いが濃いようです。しかし、彼は雪舟の直弟子等春に連なる画人であることを唱えて自らに権威づけを行い、剛腕を発揮しながら画壇の頂点を目指してそれを達成しました。しかし、後継者に恵まれませんでした。結局、雪舟流の正系は雲谷派という世評が定着し、江戸時代の画壇の主流は狩野派が占め、衰退した長谷川派は等伯の前身を語らぬままでした。かくして等伯の前名は不詳となってしまいました。

ただ、雪舟・等伯両人とも改号・改名したことが、これほど大きな謎となって後世の人々を悩ますことになるとは夢にも思わなかったことでしょう。

（※本文は平成30年4月29日に開催した特別講演会の内容を、守安氏にご協力いただきまとめたものです。尚、詳細は当展図録にご執筆いただいております）

これからの展覧会予定

2019年4月27日(土)～5月26日(日)〈会期中無休〉

◆第１・２・３展示室　2019年度春季特別展

「長谷川等伯展」（仮称）

古来より日本家屋の仕切りとして用いられてきた屏風や襖。大きな平面を持つそれらは大画面絵画の媒体としてまさにうってつけで、これまで数多くの絵師たちが存分に腕を振るい、幾多の屏風や襖の名作が描かれてきました。

能登七尾出身で桃山時代に大活躍した絵師・長谷川等伯（1539～1610）もそのひとりです。彼も京都移住後の50歳以降の時期を中心に、彩色画・水墨画の双方で数多くの「大画面作品」を制作しました。

今回で24回目の開催となる「長谷川等伯展」は「大画面作品」がテーマ。等伯晩年期制作の水墨による屏風や襖を中心に、若年期制作の仏画や「長谷川派」絵師による絵画もあわせ、作品や資料など計21点を紹介します。

等伯入魂の名品たちをぜひともご鑑賞ください。

「高士騎驢図屏風」
長谷川等伯　京都市・高桐院蔵

重要文化財「列仙図屏風」（右隻）
長谷川等伯　京都市・壬生寺蔵

2019年度　石川県七尾美術館友の会会員募集のご案内

新年度友の会会員を次の要領で募集いたします。現在会員の方で更新を希望される方は改めてお申込みください。お申込みのない場合は退会となってしまいますのでご注意ください。

★入会手続き★　①受付開始　３月１日（金）から【年度会費 1,000 円】※１
②受付場所　当館受付カウンターまたは郵便受付※２
（郵便振替用紙をご利用ください）

※１　会員証のお渡しは美術館だより第 97 号（春号・2019 年４月１日発行予定）と一緒にお送りします。
※２　郵便局備え付けの振替用紙の通信欄に必要事項《会員の区別（更新･新規･元会員）･郵便番号・住所･電話番号･氏名》をご記入のうえ、会費を添えて最寄りの郵便局窓口へお出しください。払込手数料（130 円）は恐縮ですがご負担ください。

郵便振替口座番号	００７１０－０－５０７９５
加入者名	石川県七尾美術館　友の会

★友の会特典★

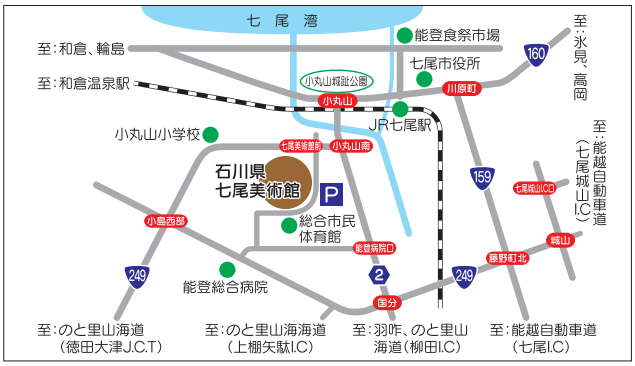
その１ 当館主催展覧会の観覧料が割引になります。
その２ 情報満載「美術館だより」をお送りします。（年度内４回発行）
その３ 特別企画展開会式･内覧会にご招待します。（無料）
その４ 販売グッズが割引になります。（一部除く）
その５ 喫茶室利用代金が 10%割引になります。（10 円未満切捨）
その６ 相互割引提携館主催の展覧会観覧料が割引になります。（会員本人のみ）

「雪中美人図」（部分）宮川長春（池田コレクション）

※左記のほかにも友の会会員限定の催し、特典がございます。４月からご活用ください。ご入会をお待ちいたしております。

プレミアム・パスポート　PREMIUM PASS　子育てにやさしい店
割引、プレゼントなど特典いろいろ！ぜひ当館でもご利用ください。

無線でネット　FREESPOT　ブロードバンド・オアシス
エントランスホール及びティールームにて、Wi-Fiスポットサービスの「FREESPOT」をご利用頂けます。



飛行機……のと里山空港から「のと里山海道」利用約45分
車……「のと里山海道」徳田大津J.C.Tから約15分又は「能越自動車道」七尾城山I.C又は七尾I.Cから約10分
タクシー…JR七尾駅から約５分
徒歩……JR七尾駅から約20分
市内循環バス「まりん号」
……JR七尾駅前「ミナ.クル」バス停から「七尾美術館前」下車（順回り約8分･逆回り約14分、1日各8便）
ななおコミュニティバス「ぐるっと７」
……JR七尾駅前５番乗り場から「小丸山台１丁目」下車（西コース約10分、１日４便）

◎次号・第97号（春号）は４月１日発行予定です。

日	月	火	水	木	金	土		
		1	2	3	4	5	2019 1 JANUARY	◆1月～3月カレンダー◆ ※■は休館日
6	7	8	9	10	11	12		◆開館時間◆ 午前9時～午後5時
13	14	15	16	17	18	19		（入館は午後4時30分まで）
20	21	22	23	24	25	26		
27	28	29	30	31				
日	月	火	水	木	金	土		
					1	2	2 FEBRUARY	
3	4	5	6	7	8	9		
10	11	12	13	14	15	16		
17	18	19	20	21	22	23		
24	25	26	27	28				
日	月	火	水	木	金	土		
					1	2	3 MARCH	
3	4	5	6	7	8	9		
10	11	12	13	14	15	16		
17	18	19	20	21	22	23		
24	25	26	27	28	29	30		
31								

〒926-0855　石川県七尾市小丸山台一丁目1番地
TEL(0767)53-1500／FAX(0767)53-6262
http://nanao-art-museum.jp